

放送日 令和5年3月1日（水）

担当者 教育長 吉田 孝志

ご来庁いただいております市民の皆様、そして職員の皆さん、おはようございます。  
教育長の吉田孝志です。

職員の皆さんにおかれましては、令和4年度末を迎え、担当・所管する業務や事務等の総まとめの時期を迎えられていることと拝察いたします。Withコロナ・Afterコロナを見据えつつ、業務、職務の完遂を目指して奮闘されておられることに敬意を表します。

さて、最近、「〇〇バイアス」という言葉をよく耳にします。これは、「何らかの選択過程を通過した人・物・事のみを基準として判断を行い、その結果には該当しない人・物・事が見えなくなる」と定義されています。物事に臨むに当たって、旧来からの固定観念や根拠が不明な思い込み、決めつけなどにより、自らの選択肢や判断の幅を狭めたり、時には間違った判断を導き出してしまったりする場合がありますことに着目し、留意するよう諫める意味も込めて使われていると思います。

例えますと、災害に遭ったことのない人は、その経験をもって判断の基準とし、「そんな災害は起こらないであろう」と考えて予断をもった判断をしてしまう例、これは正常性バイアスと言われます。また、災害時にあって、自他の条件や環境などの前提が異なっているにも拘らず、「他の人も逃げてはいないからまだ大丈夫」と考えて逃げ遅れてしまう例、これは同調性バイアスと言われます。私たちの日常にも、そうした瞬間や体験があり、「バイアス」が潜んでいるように思います。

市役所について考えてみますと、「行政バイアス」と思われることはないでしょうか。職場内対応、市民対応、事業者対応、議会対応、報道対応、関係機関・団体対応など、これまでに培ってきた経験知や成功事例、一見確立されているように思われるマニュアル等は、本当に市民本位なものであるか、行政課題等を解決する視点であり最適な判断をする前提基準となっているか、本市の第6次総合計画を推進・達成するための基準として機能しているものであるかなど、市職員としては、職場内や自身の中に、既成概念や思い込みなどによる「バイアス」は存在していないか、働いてはいないか、常に検証し、自己更新を図っていく必要があると思っています。

これからの時代は、正解のない時代と言われています。そうした中、職場でのさらなる「凡事徹底」を基底に据えながら、同僚や仲間、市民等と協働する中で、もしも「行政バイアス」があると自覚するのであれば、それらを排除するとともに、それらに縛られることなく、その場、その時に応じた「最適解」や、数多くの人々の理解が得られる「納得解」を導き出す修正力や調整力などを身に付けることが大事であり、市職員にとって、今後ますます必要となる資質であると考えています。

職員の皆さんには、社会人として自己実現を図るために、社会や職場などには、何らかの「〇〇バイアス」が存在することを常に意識し、前例踏襲型の思考から抜け出し、適正・的確で、公正な判断を導き出すことによって、社会や組織に貢献していただきたいと心から願っているところであります。未来に向けて発展を続けるここ北広島市で、上野市長のリーダーシップのもと、ともに新たなまちづくりに挑戦し続けてくださることをお願い申し上げます。